

「化学物質総合リスク評価管理システムの開発」

独立行政法人製品評価技術基盤機構
化学物質管理センター所長
重倉 光彦



ただいま御紹介いただきました、製品評価技術基盤機構化学物質管理センターの重倉でございます。本日は、私どもで行っております化学物質総合リスク評価管理システムの開発事業につきましてお話しさせていただく機会をいただき、どうもありがとうございます。

(資料：1)

本日の発表内容ですが、せっかくの機会ですので、冒頭、短時間をいただきまして、私どもの組織、NITEを御紹介させていただきまして、次いで、本日のメインテーマでございます、このシステムの開発について御説明申し上げ、また、私どもの組織で、このほかにも類似の事業の中に化学物質管理でございますとか、リスクコミュニケーションの促進といった点についての事業を行っております、御列席の皆様にも関心を持っていただけるものがあると思いますので、それらを数点御紹介させていただきたいと思っております。(資料：2)

私ども製品評価技術基盤機構は、平成13年4月に設立された独立行政法人でございます。(資料：3)現在、バイオ、化学、認定、生活福祉という4分野の事業を行っているところでして、これら4分野をひとくりにするキーワードが知的基盤ということでございます。

もともとは、昭和3年に輸出絹織物検査所というものから始まったという歴史を持っておりますけれども、これが試薬検査所など、さまざまな検査機関を統合し、形を変えながら、通商産業検査所とか製品評価技術センターを経まして、平成13年にこの形になりました。

経済産業省の傘下の組織ではございますけれども、現在は独立行政法人という形で独立しております、他省庁の事業も行えるようになっております、既に規模は小さいながらも、環境省や厚生労働省の業務なども受託して行っている状況になっているところでございます。

私ども、4分野のうちの1つでございます化学物質管理センター部分でございますが、現在、職員数が総計で110人ちょっとでございます、こうした化学物質管理に关します世界的な機関を考えますと、例えばアメリカのEPAでございますが、TSCAという化学物質管理の審査関係をやっているところが400人ぐらいとか、欧州の化学品庁ECBも、ざっと140人かなというところでございまして、私どもの組織というのも大体、それらに匹敵するというか、あるいはまだ小規模だけれども、少し工夫して頑張れば何とかなると

というようなところにいると思っ

ているところでございます。(資料：4)

本日のメインテーマでございます化学物質総合リスク評価管理システムでございます。(資料：5)

本日、安井座長から御説明ございましたように、当イニシャティブの課題マップの中で私どものポジションというのは、比較的ユニークな位置にいると思っております。すなわち、リスク管理とリスクコミュニケーション、それから一番外側を囲っております知的基盤という3つの分野にまたがっているところにあると思っております。(資料：6)

研究開発という言葉を狭く考えますと、若干私どものプロジェクトは異質な要素を含んでいるように見えるかもしれませんが、本イニシャティブでは私どものプロジェクトを含めまして、地道なデータの収集でございますとか、リスクなどのコミュニケーションを進めることも一種の科学研究である、むしろ必要な要素であると御理解いただいております。大変ありがたく思っております。

事業内容自体については、実際の社会的ニーズがございまして、開発プロジェクトであると同時に、実践の面もござい

ます。となりますと、プロジェクト管理という視点ではなかなか苦労をしますけれども、他方、実践で鍛えられておりますので、よりよいものができるはずという思いもござい

ます。私どものプロジェクトも新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)のプロジェクトの一つでございます。NEDOの有している化学物質関係の他の3プロジェクトの成果も、私どものプロジェクトの中で活用するという形になっています。(資料：7)平成17年までの5か年間のプロジェクトでございます。

私どものプロジェクトは、内容的には、リスク管理の考え方やリスクそのものについてどう考えたらいいのかということ

を助けるための情報を整備すること。それから、化学物質そのものにつきましても、既にリスクが評価された情報が出ていますので、そういうものを収集すること。そして、そういった情報をもって知識データベースを構築しまして、インターネットを使用した情報発信によってリスクコミュニケーションの支援を行なうことを考えているわけでございます。(資料：8)

その成果として期待しておりますのは、要するに、適切なリスクコミュニケーションが行われるように支援したいということ

そうしたものを用意すると。また、そうした知識データベースの成果を収集したものを情報提供システムとコミュニケーションシステムの2つで発信していこうというわけでございます。

それからインターネットのリンクをつくることによって関連の情報へつないだり、また、検討中の段階でございますけれども、コミュニケーションシステムのところでございますように、会員制のBBSでございますとか個別の問い合わせなどに対応するといった機能を付け加えていきたいと思っておりますが、この部分はまだ開発中でございます。

全体的な研究開発方法でございますけれども、基本的には、例えば消費生活センターとか、実際に企業でこうしたシステムを使ってリスクコミュニケーションをする方やそういう方からどういう問題を抱えているかなどの意見を聴取し、また、テストサイトを提示いたしまして、それに対するコメントをいただいて改良を続けるということが基本的なプロセスになってございます。(資料:11)

それに加えて、コンテンツの整備をやっておりまして、科学的に正しく、中立的で、しかも無用な不安をかき立てたりはしないコンテンツを整備しています。他方、同時にリスク管理は必要だということは主張しなければならないということで、表現ぶりなどは大変苦労しながらそうしたデータを整備しているところでございます。

次に外からこのシステムにアクセスしてきたときにどのように見えるかということの説明します。(資料:12)外からアクセスしてまいりますと、3つの入り口があるという構造になっております。コミュニケーションを行うに当たりまして、シンプルであるということが非常に重要なことと意識しております。

まず、1つ目が「化学物質管理について」という窓口でございます。ここではリスク評価に関します概念や方法論について解説をするなどの機能をここに持たせたいと思っております。

もう一つが「化学物質情報を調べる」という窓口でございます。ここにおいでいただきますと、ここから個別物質のリスク評価をした結果の情報でございますとか、化学製品についての情報でございますとか、トピックス的な情報、こういったものはここからアクセスできるようにしたいというふうに思っております。

これに加えて「コミュニケーションの場」ということでシステムを用いたコミュニケーション機能への窓口をそこに集約すると。それらが用語集でございますとか、あるいはこのシステムの外にございますさまざまなデータへのリンクとか、そうしたものとつながって全体的なシステムを構成するという形になっております。

私どものシステムのテスト段階のイメージを数点ご紹介しますが、まず「化学物質管理について」という窓口から入っていただきまして、全体的なリスク評価そのものについての解説、用語説明をしているページのサンプル例でございます。(資料:13)

今回、ユーザーの方々にアンケートや意見聴取を行いましたところ、どうしても用語の意味とか、リスク管理に関する基本的な理解が相互に不十分だという実態がわかりまして、

こういうものが必要なだろうと考えて開発したわけでございます。

読みやすく、読む気を起こさなければということで、全体的にも量を少なくし、挿絵を置いてということで、簡略なイメージでつくったわけでございます。

初期リスク評価の結果を示しているページでは、初期リスク評価のフローをベースにいたしまして、実際にそのフローに従いながら、どういうことを考えてこういうリスク評価が行われているのかということがわかるような情報の提供の仕方をしていいのかなと考えております。(資料:14)

機械的にはさまざまな物質を検索して、それについての情報を一覧で取り出せるという機能も用意しております。他方、こうした見せ方が必要だという指摘が開発の背景にあるのですが、実際に使う場面はちょっと想定しにくいとも思っております。さらに仕様を検討していくことになるでしょう。(資料:15)

P R T Rのマップなどの情報へつないでいるページもでございます。(資料:16)

製品情報のところについては現在開発中ございまして、具体的なイメージ図を示しておりませんで申し訳ございませんが、そういう情報を出していく計画でおります。(資料:17)

化学物質についてのリスク評価書を、自分でフォーマットをつくって相互のコミュニケーションには是非活用してもらおうということで、カスタムメイドの比較表のようなものをつくる機能も入れているところでございます。(資料:18)

さて、私どもで行っております他の事業ですけれども、リスク評価管理研究会というのがございまして、ここでノニルフェノールやフタル酸エステル、ビスフェノールについての研究を行っております。(資料:19)

現在までにノニルフェノールは終わっておりますが、フタル酸エステルが最終とりまとめ中、ビスフェノールAはもう少しかかるかなという段階でございますけれども、利害関係者の皆さんに集まっておきまして、有害性評価、暴露評価、リスク評価から、管理の在り方までまとめていこうという試みでございます。リスク管理手法に基づいた科学的な提言は我が国初めてのものと思っております。(資料:20)

また、私どものC H R I P、ケミカル・リスク・インフォメーション・プラットフォームという名前の省略名の文字でございますが、こういうシステムをつくりまして、現在、化学物質情報を無料で公開させていただいているところでございます。(資料:21)

現在、延べ20万物質のエントリーがございまして、毎日8,000ページ程度、比較的多数のアクセスをいただいているところでございます。

冒頭の安井座長の御説明にありましたように、私ども研究開発を行うに当たりましては、単発の探求ではなく、組織的に対応しているということで、研究的視点に加えて体系的にこういう問題に取り組むということをやっていきたいと考えているところでございます。(資料:22)、(資料:23)

こうしたイニシャティブでの考え方に基つきまして、私どもN I T Eでは言わば化学物

質管理のナショナルセンターを目指して活動していきたいと思っておりますところ、関係の皆様方の御協力をいただきたく、また、是非私どものファンクションを活用いただければと考えている次第でございます。(資料：24) 本日は、どうもありがとうございました。

資料：1

化学物質総合リスク評価管理システムの開発

独立行政法人 製品評価技術基盤機構 (NITE)
化学物質管理センター
重倉 光彦

第2回 化学物質リスク総合管理技術研究イニシアティブ合同プログラム会合

資料：2

本日の発表内容

➤ NITE概要

- 化学物質総合リスク評価管理システムの開発
- 化学物質管理、リスクコミュニケーション促進に資する最近の成果
- まとめ

第2回 化学物質リスク総合管理技術研究イニシアティブ合同プログラム会合

資料：3

製品評価技術基盤機構 (NITE)

- 特定独立行政法人(公務員型)
- 知的基盤の整備・運営
- バイオ、化学、認定、生活福祉の4分野
- 経済産業省(旧通商産業省)における工業製品・繊維製品の検査部門から発展
- 現在は環境省、厚生労働省など関係の省庁からも受託して各種業務を遂行



資料：4

化学物質管理センター

- 職員110人+
 - 日本政府機関としては大規模
 - 職員は専門的な分野に従事、研修などの育成プログラムと実務を通じて、命名法、関連法規、安全性評価、リスク評価、化学産業論などの化学専門知識を集積、活用している。
- 現在の業務
 - 化審法の施行支援
 - 化管法の施行支援
 - 化兵法の施行支援
 - 化学物質に関する情報提供
 - 標準物質に関する情報提供
 - 検査受託

世界的にもこうした化学物質専門の組織が活動中 (EUのECBなど)

資料：5

本日の発表内容

- NITE概要
- 化学物質総合リスク評価管理システムの開発
- 化学物質管理、リスクコミュニケーション促進に資する最近の成果
- まとめ

第2回 化学物質リスク総合管理技術研究イニシアティブ合同プログラム会合

資料：6

「化学物質総合リスク評価管理システム」の位置づけ

【化学物質一般】

